

沢柳政太郎の地方文化発展論 —東北帝国大学における事例を手がかりに—

石川賀一
(筑波大学大学院生)

【要旨】

本研究では、沢柳政太郎による東北帝大における大学整備と文化開発の事例から、沢柳の地方文化発展論について検討した。検討の結果、沢柳の地方文化発展論とは地方に大学を設置し、その大学を中心に地方の教育系統を形成して地方文化圏を組織することであった。そのためには大学の学者が社会の指導者として学術研究による社会の発展を支援し、社会も大学や学者の役割を意識し、学問に興味を持って活動することが必要であった。両者の関係は文化発展に対する共通した自覚によって成立するものであり、大学と社会の結合を図る機関として図書館の資料提供機能と教育機能が不可欠と考えていたことがわかった。

1. はじめに

沢柳政太郎（1865 - 1927）は明治・大正期の教育官僚であり、文部省退職後には成城小学校を創立し、大正自由主義教育運動のオピニオンリーダーとして活躍するとともに、実際の教育問題を解決するための教育学の必要性を論じた『実際的教育学』（1909 年）など数多くの著作や論稿を残した教育界の第一人者であった人物である。¹

1911 年 1 月、沢柳は東北帝国大学（以下東北帝大）初代総長に任命される。沢柳は東北帝大設置だけでなく、奈良女子高等師範など高等諸学校の設置に深く関わり、また高等教育会議においても帝大増設案を建議するなど高等教育機関の拡充に広く参与していたこと、さらに東京商業高等学校などにおける学校運営の手腕も高く評価されていたことから初代総長に任命されたと考えられる。沢柳の在任期間は約 2 年間（1911 - 1913）であったが、「研究第一主義」、「実学尊重」といった理念を打ち立てて東北帝大の機能充実に取り組み、また女性への門戸開放まで至ることになる東北帝大の受験資格の緩和を実行し、高等教育の機会拡張も推し進めた。仙台に東北帝大が設置された背景には、東北地方の文化発展を目的とした宮城県による官民あげての大学誘致運動があり、沢柳も東北帝大を高等教育・学術研究機関として充実させるとともに、東北帝大の教育機能によって東北地方の文化発展を図ろうとしていたことが推測できる。このような施策のひとつに「古典の百科全書」とも呼ばれる約 10 万 8 千冊にわたる狩野文庫の購入がある。沢柳は狩野文庫を収蔵した附属図書館によって大学の機能を充実させ、さらに東北地方の文化発展に役立てる構想があり、附属図書館は重要な役割をはたすものであったと考えられる。

沢柳の大学論に関する主な先行研究には、竹本英世「沢柳政太郎の総合大学論²」と谷脇由季子『『本当の教育』としての大学教育とは何か—『専門ノ普通教育』をめぐる³』がある。竹本は学問分野や理論と応用が密接な連絡関係をもつ総合大学が沢柳の理想であり、

「研究的精神」、「自我内容ノ涵養」といった問題解決能力の育成をめざしたものであったと述べている。そして普通教育の一貫として大学教育を捉え、大学と国家・社会との関係、大学の目的論に興味があったと指摘した。谷脇は学問の専門教育であるとともに、その専門教育を基盤とした職業教育を含んだ実社会への準備教育が沢柳の大学教育論であり、リベラル・アーツも含めていたものであったと論じている。また、東北帝大時代の先行研究には影山昇「澤柳雅太郎と女子高等教育—東北帝国大学への門戸開放—⁴⁾」、谷脇由季子「東北帝大草創期における女性への門戸開放⁵⁾」があり、東北帝大による女性への門戸開放の論議から女子高等教育や高等教育の機会均等についての考察がおこなわれている。しかし竹本は京都帝大総長時代、谷脇は臨時教育会議の論議による研究であり、影山らの研究も女性への門戸開放による限定的な研究であることから、東北帝大を事例とした大学の教育機能、任務などは論究されていない。また沢柳の図書館論の研究である山田泰嗣・渡邊雄一「沢柳政太郎と図書館教育」では、『読書法』や『学修法』にみられる自己修養を目的とした読書論から展開されたものが沢柳の図書館論であり、沢柳は図書館を自律的な人間形成を支えるための施設として位置づけていたと指摘している⁶⁾。だが山田らの研究は成城小学校における図書館教育との関連を論じたものであり、大学や文化発展論には言及していない。これは他の先行研究においてもいえることである。しかし、梅根悟は沢柳が普通学務局長時代に「大学なんていうものは図書館さえあればいい⁷⁾」という内容の発言をしていたと述べていることから、沢柳が大学における図書館の存在を重視していたと考えられる。したがって、沢柳の地方文化発展論を明らかにするためには大学における図書館についても明らかにする必要があるといえる。以上のことから東北帝大の事例を手がかりに沢柳の言動を検討することによって、先行研究では言及されなかった大学を中心とした地方文化発展論が明らかにできると考えられる。本論稿では沢柳の東北帝大総長時代の事例とその前後の言論を中心に、沢柳による地方文化発展論を明らかにする。

2. 沢柳政太郎による東北帝国大学の整備と地方文化発展構想

(1) 沢柳政太郎による東北帝国大学の整備

仙台へ赴任した沢柳は自らが起草した「東北帝国大学理科大学規定⁸⁾」(1911年4月)を発表する。この規定では受験資格を各種高等専門学校卒業生や中等教員免許状所有者まで緩和し、現職者等には授業料免除や生活費、研究費の特別給付をおこなうなど幅広く門戸を開いた。また科学概論や哲学など各科共通随意選択科目を設置し(第2章)、人文学分野の見識を補った総合的な教育・研究環境整備にも努めた。さらに沢柳は医学部・工学部の前進である医学専門部・工学専門部を設置し、東北帝大を理医工の総合大学へと拡張させた。1912年11月に牧野伸顕文相へ宛てた書簡で沢柳は「工科大学の新設ニ依り帝國工業の基礎を造るを以て任じ殊に其化学教室を力強きものとして将来の化学工業の原動力たらんとの考を以て計畫を立て候⁹⁾」と記しており、東北帝大における応用化学の研究によって、化学工業発展を目指していたことが理解できる。そして翌1912年、狩野亨吉から蔵書を購入し、狩野の要望により蔵書は狩野文庫として附属図書館に収蔵される。

沢柳とともに仙台に赴き、後に東北帝大司書官となった田中敬¹⁰⁾は「狩野文庫を語る¹¹⁾」において、沢柳が狩野文庫を人文学分野の基礎資料として附属図書館に一括収蔵し、さらには地方民にも公開して東北地方の開発に役立てたいという構想を持っていたと指摘して

いる。田中は沢柳の構想に狩野も賛同し、同じく賛同した地元の貴族院議員の荒井泰治から購入費の寄付を受け、交渉が成立したと記している¹²。

狩野文庫は人文学分野の基礎資料となっただけでなく、数多くの和算書も含まれていたことから自然科学分野の基礎資料としても意義があった。理学部には我国最初の欧文数学専門誌『東北数学雑誌』（東北帝大・1911年創刊）の創刊者である和算研究者の林鶴一が在籍し、林の蔵書と合わせると和算書の大半を所蔵することになった。さらに法文学部が設置（1922年）されると、すでに所蔵されていた狩野文庫が同分野の中心資料となり、ますます存在価値を高めた。沢柳は総長就任当初から法文学部を設置して理文からなる総合大学にする構想があり、各科共通随意選択科目も法文学部設置までの処置¹³としていたことから、狩野文庫の購入も法文学部設置の布石であったと理解できる。

また田中は沢柳から「仙台に、出来れば第二国立図書館を作りたいと考えている¹⁴」と告げられ、「大学の図書館を同時に市民にも開放して地方文化の開発に資するといった形のもの頭に描いて居られるのであらうと¹⁵」と想像したと述べている。さらに田中は沢柳が仙台の名士たちと東北帝大の将来や地方文化の向上について構想を練り、東北帝大に対して大規模な学術支援おこなった斉藤報恩会などの根本方針もこのときに定まったと述べている。沢柳は赴任直後に発表した談話で「元来大学は地方に置くのがいいのであつて、仙台は教育に適している。仙台市と東北大学のひとしく相栄えんことを望む¹⁶」と述べ、6月には学生への開講に先んじて市民を対象とした夏期学術講演会を開催し、地域社会に開かれた大学づくりを意識していたことがうかがえる。また社会を意識した沢柳の方針は附属図書館にも反映され、同年6月に制定された「東北帝国大学図書館規程¹⁷」の第六条には「学術研究ノ特志者ニハ本館主幹ニ於テ図書ノ閲覧ヲ許可スルコトアルヘシ」とあり、学術研究に取り組む一般市民に対して閲覧の道を開いた。設立時の附属図書館は、主幹の林鶴一、田中敬、林の弟子である小倉金之助、科学概論の田辺元など、狩野文庫と接点がある人物で構成され、沢柳の意見が反映された体制であったと思われる。

沢柳が進めた東北帝大の整備とは、総合的な研究が取り組むことができる環境づくりであった。そのために受験資格を緩和し、理文揃えた総合大学の形成の素地作りに取り組むなど大学の機能充実を図った。その一方で社会を意識した大学づくりにも尽力し、大学の機能による東北地方の文化発展を目指した。さらにふたつの方針を結びつける機関として附属図書館の機能に着目し、狩野文庫の購入によって附属図書館の機能向上を図った。このことから沢柳にとって附属図書館は大学の機能向上と地方文化発展の両輪発展構想の要であったといえる。

（2）沢柳政太郎の地方文化発展構想

総長に任命された沢柳は、仙台に赴任する直前の1911年3月に政治や商工業など様々な中心が集中する都会から、教育の中心点を独立させ、地方に分布する方法を論じた「教育的中心の独立及分布¹⁸」を発表している。この論稿で沢柳は「良い学校が地方に在るといふことは、教育それ自身に便利であるばかりでなく、社会一般にも善良の影響を与へる、学問を普及せしめ思想を進歩せしめるのみならず、風俗趣味等をも高尚ならしめる。¹⁹」とし、文部省在職中から高等教育機関を地方に配置して、教育の中心点をバランスよく独立・分布させたと述べている。まず大学は総合制であるため、分科大学を地方の主要都市

の一箇所に集中させたが、師範学校などその他の高等教育機関は大学とは別の地域に配置したと述べている。そして中学校もなるべく地方の郡部に設置し、都会の少青年も自宅から通える適当な郡部の中学校に入学させ、一流の中学校長は遣り甲斐のある郡部の中学校に選任させるべきであるとしている。また沢柳は優秀な教員を招聘し勤続させる方法として図書費や教材費の増加をあげ、多くの書物等を提供することによって、教師の知識欲を満たさせるとともに、各種学校の教育も発達させる有力な方法であると述べている。さらにこの書物を学問に関心がある一般市民に提供することによって、金銭的に図書館設立が困難な地方でも社会に公益を与えることができるとし、地域社会への提供を求めている²⁰。

後年、沢柳は「地方文化と教育²¹」(1925年)において、日本が維新後の中央集権化によって、文化の中心であった藩が廃止されたため地方文化が弱体化したと指摘し、新たに地方の文化の中心を作るために高等教育機関の地方設置をおこなったと述べている。そしてドイツなど西洋諸国の大学観を通じて地方の高等教育機関の役割を取り上げている。まず西洋における大学観とは、各学問分野で権威のある学者がいるといった人が主であり、その地方の「専門のオーソリチー²²」というべき学者は大学の定められた職務のほかに、地方文化の原動力として活動していることを取り上げている。また学問と出版事業の間には密接な関係にあり、あまり大きくない町から有力な新聞雑誌が刊行されていることは、その町には文化の中心として活動する有力な人物がいることを意味するとし、出版事業によって文化の発展を知ることができるとした。沢柳は日本においても同じ任務を果たすためには専門学校以上の学校が地方に設置される必要があり、できるだけ異なる地方に高等教育機関を分布したと述べている。しかし大学が設置された現在においても、出版事業のほとんどが東京に集中し、大学など高等教育機関の学者は地方の文化の中心になるという自覚がないと指摘している。また、社会も文化発展の原動力としての学者の役割に対する認識がなく、文化発展のために高等教育機関の機能を活用する方法を知らないと指摘し、お互いを地方の文化発展に対する自覚をもって関わることを求めている。そして、この自覚を持つためには都会への憧れを打破することが必要であるが、具体的な良い方法はなく「唯国民の自覚を促す外にない²³」とし、地方の文化発展に対する自覚の涵養を求めた。

沢柳による地方文化発展構想とは、地方の教育、文化の中心として設置された大学を頂点に地方ごとの教育系統を形成し、教育の機能によって文化圏を構成することであった。そして大学が文化の中心として機能するためには、学者が地方の文化発展に貢献する任務を自覚し、社会もまた大学や学者の任務を意識し、文化発展の対する自覚を持つことを必要とした。また、沢柳は図書費の増加や、地方の出版事業の発達にも言及し、教育機関の機能向上と地方の文化発展には、優良な出版物の刊行と、それを収集・提供する図書館の役割にも注目していたといえる。

3. 沢柳政太郎の大学論

(1) 沢柳政太郎の大学制度論

沢柳の大学制度に対する基本的な観念を理解できるものとして、東北帝大総長就任の前年に発表した「単立大学説に反対す²⁴」(1910年)がある。沢柳は、現時点における最高知識の教授とその応用を任務とする専門教育と異なり、学術研究を本務とし、「一國の文化の進歩を代表するもの²⁵」が大学であると定義している。そして研究者がそれぞれの専門分

野の知識交換をおこない、多角的な見地から研究を進展させるためには、複数分野を揃えた総合制大学でなくてはならないと論じている。さらに関連分野の実験室や幅広く参考図書揃えるなど設備面まで言及している。

東北帝大転出後、沢柳は「一等国の大学²⁶」（1913年）という講演をおこない、大学とは学術研究を通じて高等の学術技術を必要とする職務に就くための専門職業教育機関であり²⁷、大学の卒業者は「国民の先覚者となり指導者となり各方面に於ける将校²⁸」となることから、大学教育の目的を各職業分野の指導者たる専門家の育成であるとした。沢柳は『前途の望』（1916年）においても、卒業生の少数は学者として研究に従事するが、「単に科学を基礎とした専門的の職業に就き得るの素地を作るに過ぎない。²⁹」とし、前者と同一の見解を示している。日露戦争以降、世界の一等国であるという認識を深めた日本は、学問においても独自性の高い研究に取り組み、外国と競争していかなければならない時期にあったが、以前、日本の大学は外国語による西洋から輸入した学問の教授や応用に終始していた。この現状からの脱却を目指した沢柳は、日本語による学問や日本独自の学術研究といった「学修の独立³⁰」を求めた。そして学修の独立は、学問を楽しむ学者が現れること、日本語による学術専門書が数多く出版されなければならないと指摘している。

（2）沢柳政太郎の大学教員論

沢柳の大学観は大学教員の最高峰である大学教授の条件からもみることができる。沢柳のいう大学教授とは、第一流の学者であり、「学生を教授する任務と学術を研究する責任³¹」を全うする人物であるとした。第一流の学者としての判断は「常に新しき研究を自家専門の学問に試み、其の結果の発表せらるゝ事に由つて、之を認むるより外に無い³²」とし、沢柳が学者の研究を評価することができる著述を重要視していたといえる。

沢柳は随筆集『随感随想』においても「学者は其の研究し得たる所を著述するは亦其の責任であると云はなければならぬ³³」とし、学術研究による著述が学者の一大任務であるとしている。さらに沢柳は日本語による専門書の著述についても言及し、学問知識が系統的に記されている講義草案の出版、海外の代表的・古典的な学術書の翻訳を求めた。沢柳は各専門分野がこれらの著述に取り組むことによって、大学に専門書が一通り揃うことになるとし、国家や民間篤志による資金援助を得て出版するべきであると論じている。なお、沢柳も東北帝大で西洋の学術名著の翻訳した『科学名著集』、学術雑誌『東北数学雑誌』、『東北帝国大学理科報告』の刊行を支援し、「学修の独立」に務めている。

そして沢柳は学術研究の成果が社会に大きな影響を与えることから、学者は常に先頭に立つ国家・社会の指導者であるとした。社会の指導者の任務とは、学術研究による著述を通じて「實際家に対し解決の方針根拠を与うる³⁴」ことであり、社会の将来を見据えた実地的な研究に取り組むことが必要であるとした。さらに沢柳は、今日では実業界においても学理的な研究が行われていることから、各分野の實際家にも著述も求めている。實際家による著述は実地的な課題解決に役立つだけでなく、学術的にも有益であるとした³⁵。

また沢柳は、専門書の批評についても言及し、読者が著述を批評することは著述者にとっても有意義であり、学術分野の発展に役立つとして推奨している³⁶。後述にある「教育学批判」における教育学書の批評はその実例であるといえる。しかし、沢柳は大学教授の多くが肩書きに対する自重もなく実際に価値のある研究に努めていないこと、また社会

も学者の肩書きばかりを尊重して意見を尊重していないことを「学問の重んぜられざる二大要因³⁷⁾」と指摘し、学問に対する自覚を求めている。

以上のことから、沢柳による大学とは学術研究を通じて、社会の各分野の指導者を育成する専門職業教育機関であり、大学教員とは学術研究に取り組む学者であった。大学の学者は社会を意識した研究成果や専門知識の著述を発表することが一大任務であり、また学修の独立を図るため、学者に対し日本独自の学術研究や翻訳など日本語による学術専門書の著述を求めた。そのために複合的な研究に適した総合制大学の整備と実験室や参考図書の充実を求めた。そして学修の独立が図られた大学の卒業生は、学者の著述を活用して各分野の実践的な課題を解決していくことから、間接的に指導する学者を社会の指導者と位置づけていた。しかし学者が実践的な研究に努めず、社会も肩書きばかりで学者の意見を尊重していないと指摘し、学問に対する自覚を求めている。

4. 沢柳政太郎の図書館論

沢柳は『読書法³⁸⁾』（1892年）、『学修法³⁹⁾』（1908年）を刊行するなど、以前から読書の教育的効能に関心があり、沢柳の教育思想が「個」の自発性を重視したものであったことを忘れてはならない。そして、沢柳の図書館に関する論述は高等教育機関の現場責任者を歴任する明治40年代から大正時代に集中している。ここでは1911年の「教育的中心の独立及分布」前後の図書館の言論を中心に、沢柳の図書館論について検討する。

1909年8月、沢柳は教育関係者を対象とした東参一市四郡教育会連合の夏期講習会において、後に「教育学批判⁴⁰⁾」として活字化される連続講演をおこなっている。「教育学批判」は『実際教育學』の続編と位置づけられ、著名な教育学者の著作を批評するとともに、その過程を通じて読書法と読書の効能について論じたものである。この論述において沢柳は、読書という行為は「知識を開発する上に於ても、品位を高うしてゆく上に於ても、書物を読む事は大に効能のある事⁴¹⁾」であり、新しい事実や説を得られるだけではなく、自分の能力を働かせて理解力＝知力をつける訓練になると論じている⁴²⁾。そして「この知力の練習と云ふことは申すまでもなく書物を読んだり人と議論する時ばかりに必要なのみでなく、実際の仕事をする時に最も関係が深いものであります。⁴³⁾」と述べ、書物を繰り返し読むことをすすめている。このような読書の有効性を述べる一方で、沢柳は日本人が書物を読むことが少ないことを指摘し、その原因として①図書館がなく読書の便宜が整っていないこと、②読むべきよい書物がないこと、③書物から十分に利益を得る方法を知らないことをあげている。しかし①や②は地方の財政や書物の書き手の問題であるが、③は、よい書物はないが書物自体は多く出版されているので、書物から十分に利益を得る方法を身につければ、それなりの滋養を得ることは誰にでもできるとし、読書習慣の増大が地方における図書館設置の要因となとした。そして「又中央の図書館の如きは、今現に山口県で行つて効能ある巡回文庫の制を施かんことを希望するのであります。⁴⁴⁾」と述べ、巡回文庫による広範囲への書物提供も求めている。

「教育学批判」の翌年、沢柳は『読売新聞』1910年8月4日の朝刊一面最上段に掲載された「我国の図書館⁴⁵⁾」において、「教育といへば何人も直ちに学校を連想するを常とするも、学校と同じく、或いは見方によりては、教育上学校よりも以上の効果を奏し得る者は図書館なり。（中略）図書館は単に夫等学生生徒のみならず、広く一般の人をも教育し得る

ものなり。此の故に吾人は図書館の事業が大に発達するに非ざれば、我が国の文化は未だ大に進めりといふ能はず、又進み得と謂ふ能はざる者なり⁴⁶⁾」と述べている。

このように、沢柳は図書館の教育機能が文化発達の必須条件であり、その対象が学校教育だけでなく社会一般までであると考えていたことがわかる。そして、図書館の目的は書物の閲覧であり、図書館の教育的任務を第一に書物の供給、第二に書物の管理、第三に書物に対する興味の喚起であると論じ、図書館の利用法に関する研究がさかんにおこなわれることを求めた。教育系の雑誌に多くの論述を発表していた沢柳が、大衆メディアである新聞を通じて図書館の重要性を言及したことは、直接一般市民に向けて文化発展に対する自覚を促す行為であったといえる。

京大総長に転任した直後の1914年、沢柳は図書館大会で「図書館の教育的任務に就て⁴⁷⁾」を講演し、図書館の教育任務について論じている。沢柳はまず自ら図書館については「門外漢⁴⁸⁾」であると前置きした上で、図書館による教育の主体を図書館長及び司書、客体を学校教育以外の社会とし、図書館の任務について「兎に角社会一般に向つて読書と云ふことの利益並に其の趣味を起こさせる、それは図書館の一大任務であろうかと思う⁴⁹⁾」と述べている。そして、書物が意識をもって感化を与えることはないことから、主体たる図書館員は図書の選択、目録作成、整理、保存だけでなく、読書法の指導、読書趣味の喚起などにも取り組む必要があるとした。また多くの国民が小学校で学校教育を終えていることから、「単に或る講義をすとか云ふだけに止まずして、長く学問に対する興味又は書物を読むと云ふ趣味を養はなければならぬ⁵⁰⁾」とし、学校教育関係者にも読書趣味を喚起させる方法についての研究に取り組むことを求めた。

沢柳の呼びかけに応えた田中敬は、図書館の教育的機能を研究した『図書館教育』(1918年)を刊行する。沢柳はこの書の「序⁵¹⁾」で、学校教育の目的を「其の卒業生が他日社会に出た後に、必要に応じ自由自在に図書を利用し得る力を養成した時に完全に達せられたと云つてよい。実に学校教育を卒つた者が書物を好む習慣と、之を理解する力とを得たならば其の以上に一も不足はない⁵²⁾。」とし、「学校教育は其の生徒に図書館を遺憾なく利用する力をつけることに主力を集中すべきである。」と論じている。沢柳は「教育の効率増進の方案⁵³⁾」(1916年)においても教育の効果増進の方法として自学自修の習慣育成をあげ、学校は知識の注入や能力の開発に満足するのではなく、「人間の知能の結晶したるもの⁵⁴⁾」である図書と図書館の利用法を教えるべきであると論じている。

これらの論稿から、沢柳は読書の有効性を指摘し、文化発展に大きな効果がある図書館の設置を求めている。そして沢柳は図書館の教育的任務として社会を対象とした読書趣味の涵養を求め、学校教育に対しても読書趣味と学問に対する興味の涵養を求めている。沢柳にとって学校教育の目的とは自学自修能力を育成であり、そのためには読書趣味の涵養と図書館活用能力法の修得が必要であった。自学自修能力は学問への関心を高め、さらに自らの職業の発展に役立つものであり、文化発展の自覚を促すものと考えていた。また、これらの論稿から沢柳の図書館論の傾向が、設備論から活用論へと変化が読み取れる。特に「我国の図書館」では第一に書物の供給をあげていた教育的任務が、「図書館の教育的任務に就て」では読書趣味の涵養が一大任務あるとし、対象が図書から人間へと変化していることが理解できる。

5. 考察

まず、沢柳が想定した大学は様々な実験室や参考図書が充実し、複合的な学術研究に適した総合制大学であった。この環境で沢柳が求めた大学の任務は、社会の指導者である学者が学術研究を通じて、社会の各分野の指導者を育成する専門職業教育機関としての任務であった。その任務を果たすためには、独自性の高い学術研究と日本語による教育といった学修の独立が必要であり、そのため、沢柳は社会の発展を意識した学術研究を取り組み、研究成果やその所産を著述することを学者の一大任務とした。学者の著述は大学等によって学術雑誌や学術専門書として刊行され、さらに大学図書館にも収蔵し、学生の学習や講義の参考図書、学術研究の文献として活用させる必要があった。このように学修の独立を果たした大学を卒業した者は、学術の素養を身につけた各職業分野の指導者となり、実社会でも学者の著述を活用して問題を解決し、実家としての著述にも取り組むと考えていた。したがって、沢柳による大学の学者とは大学の教育機能と社会の文化発展の原動力であり、学者の著述は文化発展の原動力を具現化したものであったといえる。

そして沢柳は、学修の独立を果たした大学を教育の中心として地方に設置し、あわせて専門教育機関、中学校も大学周辺に分散させることによって、地方に大学を中心とした学校教育系統を形成し、教育による地方文化圏を構成することを目指した。この構想を実現するためには、大学周辺に分布する学校が大学の機能と任務を理解し、また社会にも大学の任務を理解し、学問によって文化発展を試みる各分野の実家が必要であった。沢柳が東北帝大の受験資格を中等教員免許状所有者や高等専門学校卒業生まで緩和したのはこのためであったといえる。

さらに沢柳は文化発展に対する自覚を促すために、①学問による優良書物の著述と②読書趣味の涵養と学問に対する興味の喚起が必要であり、そして優良書物を収集提供し、読書趣味を喚起させるための設備として、図書館に着目していた。特に大学図書館は学者の学術研究活動を支える大学の中核であり、地方社会に優良書物を提供する社会との結節点として、重要な役割が求められていた。したがって、狩野文庫の購入は学者の学術研究と著述活動の促進、大学教育の充実を図るための方策であると同時に、大学図書館を地方公開することによって優良書物の提供機会を拡大し、文化発展機能を充実させるねらいがあった。また、図書館は文化発展に対する自覚を促し、様々な書物を活用する能力を育成するために必要な教育機関と位置づけていた。「図書館の教育的任務に就て」や「序」などにおける図書館の教育的任務や学校教育に対する要求から、沢柳は義務教育から読書趣味と学問に対する興味を喚起させ、図書館を活用する習慣を獲得し、生涯を通じて個人の発展に必要な自学自修能力の育成を目指していたといえる。したがって沢柳は、図書館によって学校教育と社会を結合させた普通教育系統の確立し、教育の影響力によって文化発展を目指していたといえる。

しかし、1925年の「地方文化と教育」の論述から、沢柳の地方文化発展策は自身が想定していたように機能せず、効果が出ていなかったといえる。その原因は沢柳が地方文化発展の自覚の妨げであるとした「都会へのあこがれ」であり、「学問の重んぜられざる二大要因」と共通する肩書きや外見的要素を重視する国民性であった。沢柳は個人の活動のすべてにおいて、目的に対する自覚を求めている。そして沢柳が重要視した書物も意識的に感化を与えることはなく、また図書館も学校教育と異なり直接的かつ強制的な指導力に欠け、

図書館側の目的意識や利用者の自覚によって左右される難点があった。したがって、沢柳はこの国民性を是正する手段に限界を感じていたといえる。

以上のことから沢柳の地方文化発展論とは、地方に大学を設置し、その大学を中心に地方の教育系統を形成して地方文化圏を組織することであった。そのためには大学の学者が社会の指導者として学術研究による社会の発展を支援し、社会も大学や学者の役割を意識し、学問に興味を持って活動することが必要であった。両者の関係は文化発展に対する共通した自覚によって成立するものであり、大学と社会の結合を図る機関として図書館の資料提供機能と教育機能が不可欠と考えていたといえる。

- 1 沢柳政太郎の先行研究には、沢柳礼次郎『吾父沢柳政太郎』（富山房 1937 年）、新田貴代『沢柳政太郎 その生涯と業績』（成城学園沢柳研究会 1972 年）、新田義之『澤柳政太郎 随時随所楽シマザルナシ』（ミネルヴァ書房 2006 年）などがある。また東北帝大総長時代については、東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史 通史』（東北大学研究教育振興財団、2007）を参考にした。
- 2 竹本英代「沢柳政太郎の総合大学論」『広島大学教育学部紀要 第一部 教育学』47 号、広島大学教育学部、1998、pp.75-83.
- 3 谷脇由季子『『本当の教育』としての大学教育とは何かー『専門ノ普通教育』をめぐって』『成城文芸』成城大学文芸学部、no.199、2007、pp.71-53
- 4 影山昇「澤柳雅太郎と女子高等教育ー東北帝国大学への門戸開放ー」『成城文芸』成城大学文芸学部、no.172、2000、pp. 151-110
- 5 谷脇由季子「東北帝国大学草創期における女性への門戸開放ー学問研究の平等性とその保障体制としての共学制」『成城文芸』成城大学文芸学部、no.192、2005、pp. 127-110
- 6 山田泰嗣、渡邊雄一「沢柳政太郎と図書館教育」『教育学部論集』佛教大学教育学部、no.18、2007、pp.91-105
- 7 梅根悟『小さな実験大学』講談社、1975、pp.155
- 8 東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史 8』、東北大学研究教育振興財団、2004、pp.50-56
- 9 沢柳政太郎発牧野信顕宛書簡、1912 年 11 月 10 日付同日消印、国立国会図書館憲政資料室所蔵
- 10 図書館学者、図書学者として著名な田中敬は 1907 年から 1913 年まで著作助手を務めた沢柳の書生であった。「我国の教育」や「孝道」など多くの執筆活動に深く関わった。
- 11 田中敬「狩野文庫について語る」『図書図書館論集』田中敬著作集第六巻、早川図書、1988、p.199-207.（田中敬「狩野文庫について語る」『ともしび』秋田県立秋田図書館報、第 42 号、1952、p.2-7.）
- 12 田中敬「狩野文庫について語る」pp.201-202.
- 13 田中敬「狩野文庫について語る」pp.199-200.
- 14 田中敬「狩野文庫について語る」pp.199.
- 15 田中敬「狩野文庫について語る」pp.199.
- 16 東北大学五十年史編集委員会編『東北大学五十年史』、1960、pp.58.
- 17 東北大学編『東北大学五十年史』1960、pp. 1676-1678.
- 18 沢柳政太郎「教育的中心の独立及分布」『沢柳政太郎全集』第 8 巻、国土社、1976、pp.324-329.（沢柳政太郎「教育的中心の独立及分布」『教育時論』、No.932、1911、pp.17-20.）
- 19 沢柳政太郎「教育的中心の独立及分布」pp.328.
- 20 沢柳政太郎「教育的中心の独立及分布」pp.329.

-
- 21 沢柳政太郎「地方文化と教育」『沢柳政太郎全集』第10巻、国土社、1980、pp.398-403.
(沢柳政太郎「地方文化と教育」『地方行政』vol.33、no.10、1925.)
- 22 沢柳政太郎「地方文化と教育」pp.399.
- 23 沢柳政太郎「地方文化と教育」pp.403.
- 24 沢柳政太郎「単立大学説に反対す」『沢柳政太郎全集』第3巻、国土社、1978、pp.146-150.
(沢柳政太郎「単立大学説に反対す」『帝国教育』、No.330、1910、pp.3-5.)
- 25 沢柳政太郎「単立大学説に反対す」pp.150.
- 26 沢柳政太郎「一等国の大学」『沢柳政太郎全集』第3巻、国土社、1978、pp.201-219.
- 27 沢柳政太郎「一等国の大学」pp.208.
- 28 沢柳政太郎「一等国の大学」pp.201-219.
- 29 沢柳政太郎『前途の望』『沢柳政太郎全集 第7巻』国土社、1975、pp.174. (沢柳政太郎『前途の望』廣文堂、1916.)
- 30 沢柳政太郎『退耕録』『沢柳政太郎全集 第10巻』国土社、1980、pp.81-83. (沢柳政太郎『退耕録』丙午出版社、1909.)
- 31 沢柳政太郎『随感随想』『沢柳政太郎全集 第10巻』国土社、1980、pp.236. (沢柳政太郎『随感随想』富山房、1915.)
- 32 沢柳政太郎『随感随想』pp.196.
- 33 沢柳政太郎『随感随想』pp.235.
- 34 沢柳政太郎『随感随想』pp.228.
- 35 沢柳政太郎『随感随想』pp.242-245.
- 36 沢柳政太郎『退耕録』「書物の批評」pp.85-87.
- 37 沢柳政太郎『前途の望』pp.177-178
- 38 沢柳政太郎『読書法』寛永館、1892.
- 39 沢柳政太郎『学修法』同文館、1908.
- 40 沢柳政太郎「教育学批判」『沢柳政太郎全集』第1巻、国土社、1975、pp.247-368.
- 41 沢柳政太郎「教育学批判」、pp.252.
- 42 沢柳政太郎「教育学批判」、pp.254.
- 43 沢柳政太郎「教育学批判」、pp.363.
- 44 沢柳政太郎「教育学批判」、pp.253.
- 45 沢柳政太郎「我国の図書館」『読売新聞』読売新聞社 明治43年8月4日 朝刊一面.
- 46 沢柳政太郎「我国の図書館」同上.
- 47 沢柳政太郎「図書館の教育的任務に就て」『図書館雑誌』、N0.19、1914、pp.17-24.
- 48 沢柳政太郎「図書館の教育的任務に就て」、pp.17.
- 49 沢柳政太郎「図書館の教育的任務に就て」、pp. 22.
- 50 沢柳政太郎「図書館の教育的任務に就て」、pp. 22.
- 51 沢柳政太郎「序」(田中敬『図書館教育』同文社、1918、5月 pp.7-10)
- 52 沢柳政太郎「序」(田中敬『図書館教育』同文社、1918、5月 pp.8-9)
- 53 沢柳政太郎「教育の効率増進の方案」pp.74-78.
- 54 沢柳政太郎「教育の効率増進の方案」『沢柳政太郎全集』第4巻、国土社、1979、pp. 78.
(沢柳政太郎「教育の効率増進の方案」『帝国教育』vol.410、1916.)